

「キヤラ  
パン」の  
駄數と減  
耗率

動物標本  
の陳列場  
は可憐なる  
廢馬

## 一〇 荷物の放棄と斃馬の狼藉

毎年當山道を経過する所の駄獸は、其數約二千頭を下らざるべく、内二割は斃死すと云ふ。而して「キヤラパン」は少くも二十頭、多きは六、七十頭の駄馬を一團として通過するも、萬一天候の劇變に遭遇すれば、一隊残らず全滅するに至ること有り。現に各嶺の前後には、馬匹の死屍、狼藉相枕み、又嶺頂嶺下、荷物の放棄し在るもの相繼げり。斃馬は其の古きは既に白骨と爲れるも、新しきは依然狀態を變せず。惟ふに空氣の乾燥、氣候の寒冷等に因り暫く腐爛の狀を呈せざるなり、宛然動物の標本陳列場を見るが如き感あり。斃馬は已むを得ること乍ら、殊に可憐なるは負傷駄載に堪へざるか、或は罹病又は疲勞の極、駄載に堪へざる廢馬の尙ほ未だ死に至らず、又餓狼鷲鴉の見殘す所と爲りて、食ふに草なく、飲むに水なき邊、眼窪み肉落ち、嘶くに力なく、歩むに氣盡き、彼處此處に悄立し、通過の旅客を見送るの狀は、人をして惻隱の情に堪へざらしむ。彼は好んで負傷したるにも非らず、求めて疾病に罹りたるにも非ざるなり、其の負傷し疾病に罹りて遂に廢馬となりし所以は、一に其主人に盡したる「不幸の賜」たるに過ぎざるなり。主人敢て情なきに非ずと雖も、